

# あいづちとの比較によるフィラーの機能分析

石川 創

【キーワード】話しことば 談話分析 感動詞 応答詞 言いよどみ

## 1. はじめに

### 1.1. 先行研究の問題点と本稿の目的

「フィラー」という術語が一般的になったのは 1990 年代以降のことである。1980 年代は「言いよどみ」と呼ばれることが多く、ほかにも、遊び言葉、場つなぎ言葉など、様々に呼ばれていた。

フィラーの機能は、かつては発話と発話の間を埋める無意味な語という程度の定義であったが、1980 年代に入ると、小出慶一(1983)らがフィラー(言いよどみ)にはやりとりを和らげる機能があると論じている。1990 年代以降は、フィラーに積極的な機能を認める研究が増え、田窪行則・金水敏(1997)は、言い淀みを含む感動詞・応答詞類の形式は心的過程の反映物であり、次に続く文の表現類型が決定できる可能性があると指摘している。また、山根智恵(2002)は、フィラーには「話し手の情報処理能力を表出する機能」「テキスト構成に関わる機能」「対人関係に関わる機能」の 3 種の機能があると結論づけた。

山根はフィラーの分析にあたり、講演、留守電、対話、電話の対話、4 種類それぞれの談話におけるフィラーのあらわれ方について観察している。また、金田芙久美(2008)も場面別の談話(面接、インタビュー、ロールプレイング)と自然談話のフィラーのあらわれ方を観察しており、近年では談話の種類とフィラーの関係について論じられることも多い。

以上のとおり、フィラーの研究は多岐に渡るが、先行研究の問題点として、フィラーの機能を印象的に論ずるにとどまっているということがある。個々のフィラーの機能について、特に裏付けもなく、「このフィラーは話し手のこのような心的態度の表明である」と結論付ける研究も多く、客観性を欠いている。

本稿では、フィラーのあらわれる発話の機能や、フィラーと共通する形式のあいづちの機能と比較をすることで、フィラーの機能を多角的・客観的に分析することを目的とする。

### 1.2. 本稿におけるフィラーの定義

「フィラー」という術語の定義には一定の見解がなく、フィラーの範疇も研究者によって異なるため、本節で、本稿におけるフィラーの定義を示す。

杉戸清樹(1989)は、発話を「あいづち的な発話」と「実質的な発話」に二分している。

本稿では杉戸の分類を参照し、フィラーを「実質的な発話中にあらわれる感動詞類」と定義する。談話資料中の1発話ごとに実質的な発話かあいづち的な発話かを判定し、実質的な発話中にあらわれる感動詞類をフィラーとして認定する。

この定義は、フィラーとあいづちの境界を明確に区分できるものではなく、例えば「ご出身は北海道なんですか」と問われて「私は、そうですね、釧路の生まれです」と答えたような場合の「そうですね」は質問に対する肯定の「あいづち的な発話」とも考えられる。しかし筆者の主観を排除し、フィラーの用例をなるべく広く収集するために、上記の定義とした。

以上が本稿におけるフィラーの定義である。なお、杉戸が定義する「あいづち的な発話」は、以下本稿では「あいづち発話」と称する。

## 2. フィラーの抽出

### 2.1. 談話資料

フィラーの分析に先立ち、分析対象となるフィラーを談話資料から抽出する。本稿に用いた談話資料は以下の2種で、全8,123発話である<sup>2</sup>。

資料A 【談話例1～11】：日常会話4,406発話

大学院生の雑談(20代男性・女性)、職場での雑談(40代男性・女性)

資料B 【談話例12～17】：テレビ放送3,717発話

『はなまるマーケット』(TBS)、『徹子の部屋』(テレビ朝日)

司会者1～3名およびゲスト1名による対談

このほか、筆者の以前の研究の引用等で、一部他の談話資料から引いた例もあるが、それについては、その都度引用元を示す。

### 2.2. フィラーの総数と内訳

本節では、各談話資料中のフィラーの出現総数を調べ、それぞれのフィラーが、どのような機能の実質的な発話にあらわれやすいかを観察する。実質的な発話の

---

<sup>1</sup> 「なんらかの実質的な内容を表現する言語形式(たんなるくりかえし以外の名詞、動詞など)を含んで、判断、説明、質問、回答など、事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話」(杉戸1989, p.50)。

<sup>2</sup> 各資料の所要時間：日常会話…談話例1(21分26秒)、談話例2(15分54秒)、談話例3(7分27秒)、談話例4(13分43秒)、談話例5(5分44秒)、談話例6(4分50秒)、談話例7(6分10秒)、談話例8(37分08秒)、談話例9(2分47秒)、談話例10(29分16秒)、談話例11(4分44秒)；テレビ放送(両番組とも2005年12月15、16日放送分・談話資料としての使用未承諾)…『はなまるマーケット』談話例12(5分27秒)、談話例13(23分34秒)、談話例14(1分00秒)、談話例15(23分31秒)、『徹子の部屋』談話例16(19分29秒)、談話例17(25分19秒)

機能は、ザトラウスキー、ポリー(1993)の発話機能の12分類(pp.67-71)を参考にして、大きく次の4種に分けた。

- ① [情報提供]: 主観的な意見, 客観的な事実などを伝える。質問に対する答えを含む。ザトラウスキーの分類のうち, 〈情報提供〉, 〈意思表示〉, 〈関係作り・儀礼〉などが該当する。
- ② [情報要求]: 情報の提供を求める発話で, 「質問」の類が多い。ザトラウスキーの分類のうち, 〈情報要求〉, 〈言い直し要求〉などが該当する。
- ③ [同意要求]: Yes, No の返答を求める。ザトラウスキーの分類のうち, 〈同意要求〉, 〈共同行為要求〉, 〈単独行為要求〉などが該当する。
- ④ [その他]: 言いさし等で発話の機能が不明なもの。また, ザトラウスキーの分類のうち, 〈注目要求〉の多くも, これに該当する。

上記以外のザトラウスキーの発話機能の分類について補足すると, 〈言い直し〉は独立した発話機能とは考えず, 元の発話の機能と同様とする。〈談話表示〉も, 他の機能の実質的な発話の一部と考える。また 〈注目表示〉の多くは, 筆者の分類ではあいづち発話として認定される。

本稿の談話資料からは, 全1,344例のフィラーが抽出された<sup>3</sup>。談話資料中の実質的な発話は4,510発話で, 1,136発話(25.2%)がフィラーを含む発話である。

【表1】フィラーとフィラーがあらわれる実質的な発話の機能との関係

発話機能 代表形	情報提供		情報要求		同意要求		その他		計
	用例	%	用例	%	用例	%	用例	%	用例
1. あ(あ)	143	64.7	33	14.9	28	12.7	17	7.7	221
2. あの	363	90.3	15	3.7	22	5.5	2	0.5	402
3. あれ	5	27.8	8	44.4	2	11.1	3	16.7	18
4. いや	88	93.6	4	4.3	0	-	2	2.1	94
5. う(一)ん	49	83.1	4	6.8	3	5.1	3	5.1	59
6. え(っ)	23	27.1	53	62.4	6	7.1	3	3.5	85
7. ええ	8	61.5	2	15.4	2	15.4	1	7.7	13
8. えー(と)	71	85.5	7	8.4	3	3.6	2	2.4	83
9. そう <sup>4</sup>	59	73.8	7	8.8	9	11.3	5	6.3	80
10. その	81	92.0	4	4.5	3	3.4	0	-	88
11. はい	28	90.3	0	-	0	-	3	9.7	31
12. ん	19	67.9	2	7.1	5	17.9	2	7.1	28
13. その他 <sup>5</sup>	102	71.8	18	12.7	16	11.3	6	4.2	142
計	1039	77.3	157	11.7	99	7.4	49	3.6	1344

<sup>3</sup> 正誤・諾否の問いかけに対する発話頭の「はい, ええ, う(一)ん, いえ, いや」, 直前の語の母音をのばしたものはフィラーの用例としていない。間投助詞が後接したものは用例としている(「あのさ」「えーとね」はそれぞれ「あの」「えー(と)」の用例)。

<sup>4</sup> 「そう」は後接する成分によって, 様々な形式をとる。「そう(か)」=「そっか, そうですか」, 「そう(ね)」=「そうね, そうですね」など。

<sup>5</sup> その他=「へえ, ふーん」など, 用例数が12以下の語, または語形の判定が難しい語。

【表 1】は、それぞれのフィラーが、どの機能の実質的な発話にあらわれたのかを示したものである。なお、実質的な発話の総数 4,510 発話の機能の内訳は、① [情報提供] が 3,516 発話(78.0%)、② [情報要求] が 446 発話(9.9%)、③ [同意要求] が 337 発話(7.5%)、④ [その他] が 211 発話(4.7%)である。これはフィラーを含む実質的な発話の内訳と近く、特別にフィラーのあらわれやすい、あるいはあらわれにくい実質的な発話の機能はないといえる。

【表 1】から注目される結果は、以下の 3 点である。

ア. 「あ (あ)」「あの」の用例がもっとも多く、全体の 5 割近くを占める。

イ. 一部のフィラーは、特定の機能の実質的な発話にあらわれやすい。

→ [情報提供] では「あの、いや、その、はい」、[情報要求] では「あれ、え」、[同意要求] では「ん」のフィラーが、それぞれ平均より 10%以上多く出現。また、「そう」のうち、「そう (ね)」（そうね、そうですね）の形式は、18 例中 17 例(94.4%)が [情報提供] の発話にあらわれる。

ウ. 「あ (あ)」は、どの機能の実質的な発話にも一定以上の用例がある。

→ 用例の少ない「あれ」や「ええ」を除けば、[情報提供]、[情報要求]、[同意要求] の発話にそれぞれ 10%以上出現しているのは、「あ (あ)」のみ。

「あの」はいわゆる言いよどみとして、「その」や「えー (と)」と同列に扱われることが多い。しかし本稿の調査では、「あの」の用例は、「えー (と)」や「その」の約 5 倍である。このことから、これらのフィラーは、発話の中で適当に表出するわけではなく、それぞれに機能の差があると考えられる。また、上記イであげたような、特定の機能の実質的な発話にあらわれやすいフィラーは、実質的な発話の機能が、それらのフィラーの機能を考察する手がかりとなるであろう。

次節では、上記ア～ウで取り上げた語を中心に、フィラーの機能を分析する。

### 3. フィラーの機能分析

#### 3.1. フィラーの「機能」の定義

フィラーの機能分析を行う前に、本稿におけるフィラーの「機能」という用語について定義をする。フィラーの「機能」と、情報提供、情報要求、同意要求等の実質的な発話の「機能」とは、当然異なるものである。

山根(2002)には、フィラーの「機能」と「役割」という用語について、「フィラーが持つ働きを大きな意味で用いる場合は機能という用語を、機能の中の細かい働きという意味で用いる場合は役割という用語を使用する。たとえばフィラーの働きのうち『対人関係に関わるもの』は機能、聞き手への『注意喚起』は役割のように使用している」(p.6) とある。

本稿におけるフィラーの「機能」は、山根の「役割」とほぼ同義である。次節以降、「情報を“受容”する場合にあらわれるフィラー」「“念押し”をする際にあらわれるフィラー」のように論じるが、“受容”、“念押し”などが、本稿における

フィラーの「機能」である。なお次節以降では、あいづちの「機能」について触れることも多いが、これも同様に扱う。本稿中では、基本的にフィラーやあいづちの「機能」には“ ”を付し、実質的な発話の機能には[ ]を付して示す。

### 3.2. あいづちの機能とフィラーの機能の比較

中村(2007)がフィラーの先行研究について「場合によってはあいづちとの境界が曖昧」(p.150)とするように、あいづちとフィラーの形式が共通することが指摘されることは多いが、フィラーの機能があいづちと比較されることは少ない。フィラーは実質的な発話にあらわれるという点であいづちとは異なるが、同一の語形を持つ以上、何らかの関連性はあると考えられる。一部のフィラーは、あいづちとの比較により、その機能をあきらかにできると思われる。

石川(2008)では、あいづち発話の「連鎖」という現象に着目して、あいづちの機能を考察した。

#### (1) あいづち発話の「連鎖」・NHK 第一『ラジオ深夜便』2008.2.29 放送<sup>6</sup>

- 5A えー今日のZ {地名} は どんなお天気だったでしょうか  
6B そうですねー今日はもう穏やかな//えーはるびよりといった感じでした  
7A おだやかな  
8A ええ  
9B はい  
10A そうですか  
11B ええ

石川(2008)では、個々のあいづちの機能を分析した上で、「リアルタイムで進行する会話における、意思の疎通」の手段として、実質的な内容を含まないあいづちが話し手と聞き手の間で「連鎖」することを示した。次節以降でフィラーと比較するあいづちの機能は、注記のない限り石川(2008)で考察したところに基づく。

### 3.3. 情報を“受容”する「あ(あ)」

あいづちの「あ(あ)」は、情報の“受容”(情報の獲得)をあらわす。相手の発話・自分自身のひらめきなどから発話者は情報を“受容”(し、その結果驚いたり感心したり)する、というのがあいづちにおける「あ(あ)」の機能である。“受容”という機能の性質上、“理解”をあらわす「そう(か)」と共にしやすい。

<sup>6</sup> 談話資料の表記に関する注記:「↑」=上昇イントネーション(下降・平らなイントネーションについては省略);「//」=他の話者の発話と重なった箇所;「{ }」=プライバシー保護による伏字等に関する注記;「[ ]」=文字化された談話資料ではよみや表記が不明であるものに関する補足;「( )」=直前の発話から経過した時間(単位:秒)。3秒未満の間の場合は省略;「=」=ひとつの発話が一行を超えて続いていることを示す;あいづち発話は右寄せで表記する。ただし先行発話短い場合は、先行発話に続けて記す。

- (2) 【談話例 1】——連鎖・「あ (あ) + そう (か) > 「うん」<sup>7</sup>  
 361B え 一太郎 {不明瞭} あ 一太郎のほうがつかいやすい↑  
 362A 縦書きだもん  
 363B あー そっかー  
 364A うん

フィラーの「あ (あ)」は、2.2.で指摘したように、どの機能の実質的な発話にも一定以上の用例がある。

- (3) 【談話例 15】—— [情報提供] 中の「あ (あ)」  
 522Y いえ え Aくん いくつになった  
 523A さんじゅう今度 ろくになります  
 524Y ああ //そりゃるい 涙腺も弱くなるよそれは
- (4) 【談話例 4】—— [その他] 中の「あ (あ)」・[情報要求] 中の「あ (あ)」  
 177E 盤上から とりのぞかれた駒が 盤上にもう一度//復帰するから それ  
 =で なんか ちえ ちえ チェスよりも むずかしいらしいです  
 178B あ もどるから  
 =なるほど  
 179C あ チェスはもどれ//ないんですか

- (5) 【談話例 8】—— [同意要求] 中の「あ (あ)」  
 469B えっとー 新大阪からじゅ 十分 [じゅうなんぶん] ぐらいの ところ  
 =ろなんですけど  
 470A 電車で  
 471B 電車で  
 472A あー  
 473B じゅうさん  
 474A あ 十三 [じゅうそう] ですね↑  
 475B じゅうそう //あれでじゅうそうって読むんですか

フィラーの「あ (あ)」は、あいづちの「あ (あ)」と同様に、“受容”の機能を持つと考えられる。「あ (あ)」というフィラーには、特別な表現意図はなく、単純に相手の発話内容を“受容”するものであるため、[情報提供]、[情報要求]、[同意要求]、いずれの機能の発話中にもあらわれうるのである。

### 3.4. 相手に対する“念押し”——発話末の「はい、ええ、う (一) ん」

「～というわけです、はい」のように、発話末に「はい、ええ、う (一) ん」

<sup>7</sup> 「>」はあいづち発話の連鎖において、「連鎖」する順をあらわす。この場合、363Bのあいづち発話「あー、そっかー」に続いて、364Aのあいづち発話「うん」があらわれるという連鎖であるため、「あ (あ) + そう (か) > 「うん」という記述になる。

があらわれることは、多くの先行研究で指摘されている。山根(2002)が「納得したり理解したりしたときに自分めあてに打つもの」(p.51)と説明するように、これらは「自分めあて」のフィラーとされることが多い。

本稿の談話資料では、発話末のフィラー「はい、うん(、ええ)」は全て〔情報提供〕の発話末に出現した。

(6) 【談話例 1】——〔情報提供〕中の「う(一)ん」

350A あたしできれば 200 枚書かなきゃいけない

351B (4.0)でもたぶん 6 万ぐらい書くかな

352B で それでけずる↑ みたいな//感じにする うん

(7) 【談話例 17】——〔情報提供〕中の「はい」

753D そのときに—あの—世界陸上に—行くべきか それか—あの—  
=大阪のと 当時は大阪の会社に所属してたんですけど 大阪でト  
=レーニングをするべきか あの 父親もまあ ちょっと助かる見込み  
=がなかなかないっていう状況//だったので— はい

これらの「うん」や「はい」は、「自分めあて」の納得や理解をあらわすものではないと筆者は考える。あいづち発話の連鎖の用例を参照し、解説する。

(8) 『ラジオ深夜便』2007.9.18 放送——連鎖・「そう(か)」>「はい」

12B ほいでまたきょうは蒸し暑かったです

13A そうですか

14B はい

「そう(か)」>「{はい、ええ、う(一)ん}」という連鎖は、ほとんどが〔情報提供〕の発話に対して起こる。話し手の〔情報提供〕に対して聞き手が「そうですか」と“理解”を示し、それに対して話し手が「はい」と聞き手が理解した事実(=自身の発話内容)を“肯定”するというのが、この連鎖の詳細である。

〔情報提供〕の発話末の「はい、ええ、う(一)ん」というフィラーは、〔情報提供〕>「そう(か)」>「{はい、ええ、う(一)ん}」という連鎖から、聞き手の「そう(か)」がなくなったものである。例(8)でいえば、13Aの「そうですか」を待たずに、14Bの「はい」を発話した結果、「ほいでまたきょうは蒸し暑かったです、はい」となったわけである。聞き手の「そう(か)」という“理解”のあいづちを待たずに、「はい、ええ、う(一)ん」と自身の発話を“肯定”することは、自身の発話内容を聞き手に対して“念押し”していることになる。

相手に対する“念押し”の機能を持つということは、発話末の「はい、ええ、う(一)ん」というフィラーは、「対他的」なサインといえる。

なお、田窪・金水(1997)は、文末の「はい、ええ」等について、「『こちらの出力が終わったので、そちらで処理に移りたい』という信号」と論じている。聞き手に対する働きかけという点において、筆者の主張は田窪・金水の論に近い。

本稿の談話資料中に発話末の「ええ」の例はないが、例(9)にあげたように、他

の談話資料には多く例があり、「ええ」にも“念押し”の機能があることがわかる。

(9) 『全力!!虎中継』(テレビ大阪) 2008.5.20 放送

48G ええ あの一 ピッチャーは攻めて やっぱりバッターは受け身ですか  
=ら ええ

49A あ一

50G ただそれがね↑ ピッチャーが逃げて 逃げて逃げてとなってくると  
=立場は 逆になってくるんですよね↑ ええ

3.5. 相手の問いかかけの適切性を認める「そう(ね)」

上昇調でないあいづちの「そう(ね)」は、相手の「同意要求」に対する“肯定”として用いられる。

(10) 【談話例 7】

141A (32.0)レコーダーってどれくらいとれるんですか↑

142B これですか↑

143A うーん

144C まあ何百時間でとれるよね↑

145B そうですね

一方、フィルターの「そう(ね)」は、2.2.で指摘したように、ほとんどの用例が「情報提供」の発話中にあらわれる。

(11) 【談話例 8】——「情報提供」中の「そう(ね)」

524B ええ まあ ま たまには新幹線で安くしてもいいかなーと思って

525A うーん

526A 三時間くらいですからね

527B さんじ かん 三時間 そうですね 三時間かからないですね

これは、フィルターの「そう(ね)」に、あいづちと同様、相手の発話を“肯定”する意識があることを示している。当該の話題について疑問を呈することがないために、「情報要求」や「同意要求」の発話にはあらわれないわけである。

先行研究では、小出(1983)が「応答の初めに『そうですね』という言葉がよく使われる」ことについて、「すぐに答え始めて、ぶっきら棒な印象を与えることになるのを、避けるための手段」であり、「応答の仕方を考えるための時間稼ぎという面もあるが、やりとりの潤滑油という側面もある」(p.87)と指摘している。

質問に対する応答の発話は、「そうですね」で始まる場合が確かに多いが、問いかかけに対して無条件に「そうですね」で始まる発話があらわれるわけではない。

(12) 2008.10.8・浦和レッズ対ガンバ大阪・試合後選手インタビュー

1A おつかれさまでした 前半こうかなり押し込まれる時間も長かったと思  
=うんですが いかがでしたか

2P そうですねあの一 多少 そういう時間もありませんけど そういう一



=時間を耐えれば うちにも流れがくると思ってたので まあー 最初に  
=点とられてしまったんですけど ま なんとか その1点にいくとめよ  
=うと思って やってました

3A そういう先に失点してしまった中で ハーフタイムどんな雰囲気だった  
=んでしょかベンチの中で

4P えもうあの やることがはっきりしてるので もうとにかく 点を取り  
=に行くってことだけで ま それだけに集中してみんなやってみ  
=た はい

5A それでこの 埼玉スタジアムで 浦和レッズをくだして 決勝進出を決め  
=た どんな気持ちなんですか

6P そうですねあの こういう 雰囲気の中で ぼくらが アウェイで勝てる  
=ってということがほんとに一 よかったと思うし また ひとつ ぼくらの  
=力になったと思います

このインタビューでは、P はほとんどの質問に対して「そうですね」で始まる  
答えを返しているが、3A の質問に対しては、「そうですね」があらわれていない。  
また「点を取ることに集中してプレイした」という発話内容も、「ハーフタイムに  
ベンチはどんな雰囲気だったのか」という質問に対して適切な答えではない。こ  
れは、3A の質問はP にとって適切な問いかけではなかったということである。

このことから、「そう (ね)」は相手の問いかけの内容が自分にとって適切であ  
る場合にあらわれることがわかる。これにも、やはり根底に相手の発話を“肯定”  
する意識があるといえよう。

#### 4. その他のフィラー

##### 4.1. 「え (っ)」と [情報要求]

「え (っ)」という語は、あいづち発話、特に「連鎖」にはあまりあらわれない  
ため、あいづちの機能との比較はできない。しかし、「え (っ)」があらわれる実  
質的発話の機能に大きなかたよりが見られる。「え (っ)」は、2.2.の【表 1】に示  
したとおり、用例の6割以上が [情報要求] の発話にあらわれる。

(13) 【談話例 8】—— [情報要求] 中の「え (っ)」

4B で このマイクが おとといアマゾンで買ったんですがー

5A え 別物 なんですか 別売り

6B 別物ですね はい

[情報要求] の発話にあらわれやすいということは、「え (っ)」というフィラ  
ーは、相手の発話内容についてさらなる情報を欲している、あるいは相手の発話  
内容が自分の理解の範囲外だった場合にあらわれやすいということである。

(14) 【談話例 1】—— [その他] 中の「え (っ)」

141B でもこれは一 付属の なんか なんか線を買ったら

- 142A うん  
 143B MD からも //なんか パソコン 介さずに その できるんだって  
 144A うん  
 145A え すごーい

例(14)は「情報要求」の発話ではないが、自分の想定外の情報を提示されて、「え、すごーい」と発話している。「え(っ)」というフィラーは、発話者の“意外”の表出として用いられる。

#### 4.2. あらたまった場面における「あの」の多用

本稿では、日常会話とテレビ放送の2種類の談話資料を用意したが、一部のフィラーは、談話資料の性格によって使用頻度が大きく異なっている。

2.2.の【表1】に示したとおり、本項の談話資料では「あの」の用例がもっとも多かったが、特にテレビ放送では、全652例のうち4割以上の284例が「あの」であった。

##### (15) 【談話例16】—— [情報提供] 中の「あの」

- 130S あとー あのー また全然違う理由で あの 飛行機に乗るときもま  
 =た ね↑  
 131T はー  
 132S あのー 最近は 座席にこう 置く 座席の横のところに置くわけにも  
 =いかないので  
 133T うん  
 134S いちいち 隣の席を やっぱり 買って チェロとおんなじように買った  
 =て その おー 座席に シートベルトでこう くりつけて いっしょ  
 =にのらさないと // あのー  
 135T あ バイオリンでもそうだった//んですか  
 136S え(え) バイオリ  
 =んは今 あの 荷物室について言われちゃうんですよ

もちろん、テレビ放送でしか「あの」が使われないわけではなく、日常会話においても、全692例のフィラーのうち、118例(17.1%)が「あの」である。

田窪・金水(1997)では、「あのー」を「形式検索」の言い淀みとしており、「話し手が聞き手に向けての適切な表現形式(モノの名前等も含む)の検索/作成に入っている時に用いられる」と説明している。テレビ放送は不特定多数の人間に視聴されるため、情報の正確さやことばづかいに十分に留意しなければならない。そのため、「適切な表現形式」を検索/作成する「あの」が多用されるのであろう。

以上のことから、「あの」はあらたまった場面に多く用いられるフィラーであるといえる。

## 5. フィラーとあいづちの相違点

3.では、フィラーと同じ形式を持つあいづちの機能と比較して、フィラーの機能を分析した。3.2.で、中村(2007)がフィラーの先行研究について「場合によってはあいづちとの境界が曖昧」と指摘したことを挙げたが、フィラーとあいづちの機能には、どのような相違点があるのだろうか。

石川(2008)では、実質的な内容を含まないあいづち発話の連鎖というごく短いやりとりが、「聞き手が自分の発話を理解しているか、自分が話し手の発話をどのように受け止めているか、また自分が話し手・聞き手どちらの立場であるか」といったことを表明し、連続的な会話を成立させると結論付けた。

すなわち、あいづち発話は、「相手の事情を考慮」して表出されるものであり、あいづち発話が欠けると連続的な会話が成立しなくなる。“肯定”のあいづちはその最たる例であり、例(10)の142Bと144Cの[同意要求]に対しては、143Aと145Bの“肯定”のあいづち発話がないと会話が次に進まない。

### (10) 【談話例7】(再掲)

141A (32.0)レコーダーってどれくらいとれるんですか↑

142B これですか↑

143A うーん

144C まあ何百時間でとれるよね↑

145B そうですね

フィラーも会話の中であらわれる以上、対他的なサインであることに変わりはないが、あいづちが会話する相手との関係の中で表出されるのに対して、フィラーは基本的に発話者自身の都合によって表出される。

3.4.でとりあげた発話末の「はい、ええ、う(ー)ん」は、相手の“理解”を待たずに、自身の発話内容を“念押し”するものであり、3.5.でとりあげた問いかけに対する「そう(ね)」も、自分にとってその問いかけが適切であることを表明するものである。4.2.でとりあげた「形式検索」の「あの」も、「適切な言語形式を検索する」という発話者自身の都合によってあらわれるものであり、相手の都合を考慮したものではない。

以上のとおり、「相手の事情は考慮せずに、発話者自身の都合によって表出する」という点において、フィラーはあいづちとは異なる。そのため、「あの」や「えー(と)」のように、フィラーでしか用いられない形式や、相手の発話への“理解”を表明する「そう(か)」(そっか、そうですか)のように、あいづちでは頻繁に用いられるのに、フィラーにおいては用例が少ない形式も存在するのである。

## 6. おわりに

本稿では、従来の研究において印象的に論じられることの多かったフィラーの機能を、あいづちの機能や、そのフィラーのあらわれる実質的な発話の機能と比

較することで、客観的な分析を試みた。

しかし本稿の方法では、あいづちと共通する形式を持たないフィラーは分析の対象外となる。今後はフィラーにしか存在しない形式の語についても、客観的に分析する方法を探ってゆきたい。

また、本稿の分析対象は感動詞類のみであったが、先行研究においては、「まあ」や「もう」などの語もフィラーとして扱われることが多く、筆者もこれらの語について、フィラーの範疇に含めるべきだと考えている。そのほか、「なんか」「でも」「だから」など、発話中に不自然なほど多用される副詞や接続詞の類が、話しことばには多く存在する。フィラーの「あの」や「その」も、現在は多くの文法書や国語辞書が感動詞としての独立した機能を認めているが、元は連体詞であった。感動詞以外の品詞が、本来の意味を失い、フィラーとしての機能を獲得する過程を明らかにすることができれば、フィラーの研究は大きく進展するであろう。フィラーの範疇に含まれる語であることを明確に認定するための定義を作成することも、今後の課題である。

### 【参考文献】

- 石川創(2008)「あいづち発話の連鎖で成立する会話」(日本語学会 2008 年度秋季大会予稿集)
- 金田芙久美(2008)「会話中に発生するフィラーについて—自然談話調査と談話別談話調査から—」(『語文』132)
- 小出慶一(1983)「言いよどみ」(水谷修編『講座日本語の表現 3 話しことばの表現』)筑摩書房
- ザトラウスキー、ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 杉戸清樹(1989)「ことばのあいづちと身振りのあいづち—談話行動における非言語的表現」(『日本語教育』67)
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」(音声文法研究会編『文法と音声』)くろしお出版
- 中村香代子(2007)「日本語の感謝表現と共に用いられるフィラーについて—自由記述式談話完成テストの回答分析から—」(『語学教育研究論叢』24)
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

<付記>

本稿は早稲田大学 2009 年度特定課題研究助成費(課題番号 2009A-819,「感動詞・応答詞類に関わる話しことばの諸現象について」)による研究の一部である。

—いしかわ そう 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程—